

のぐち ひかる
テキスタイルデザイナー・(社)日本ダーニング協会 理事 野口 光



野口氏の考案した「立ち型」ダーニングマッシュルーム

筆者は1980年代後半からイギリスでテキスタイルデザインを学び、その後デザイナーとしてロンドンで活動する中、多くのクリエイティブ関係の仲間ができました。テキスタイルアーティストとして活躍しているレイチェル・マフューさんもその一人です。2010年当時、東ロンドンでレイチェルさんが経営する毛糸を中心とした手芸資材店を訪ねた際に、店頭にあった愛らしい木製の「お父さん特製ダーニングマッシュルーム」を発見しました。その頃、まだ『ダーニング』というコトバすら知らなかった筆者は彼女からその場でそれが『繕うための道具』であることを教えられ、彼女がDIY（大工仕事）

日常生活で日用品が壊れたときにどのように対処をしていますか？修繕に対する考え方は世代や経験によってかなり違うとはいえ、「買い換えたほうが安い」という消費社会に慣れてしまった現代、日用品が壊れたときに、自らの手で修繕して使える状態にするという行為そのものが非常に少なくなっていると思います。筆者が研究、実践、指導をしているダーニング（英語で繕うという意味）は、私たちが毎日着ている『衣類』の傷みを自身の手で修繕し、再び気持ちよく着続ようという行為です。小学校の家庭科で習う程度の簡単な手縫い技法を応用することで、簡単な傷みから穴あきや避けたいような重症の傷みまで繕うことができます。

をする際に愛用しているというウールのセーターの上にダーニングの縫い方をデモンストレーションしてくださいました（写真1～3）。当時、繕うというのは「新品同様にする」「繕い跡はできるだけ限り見えないようにする」ことだと思っていたため、地色とはかけ離れた鮮やかな毛糸で繕いつくされたセーターを見て衝撃を受けました——繕うことは恥ずかしいことではない——その衣類に対する愛情や時間といったその人そのものをあらわすパワフルな行為であることに気づかされました。それ以来、私は繕い跡を隠すことなく、むしろデザインとして目立たせる、あるいはその衣類や着る方に似合う、家



写真1～3 ダーニングとの出会いとなったレイチェル マフューさんとレイチェルさんのセーター。数年前に繕われた箇所は糸が縮絨し、近年繕った箇所は糸目が見えることで、レイチェルさんが数年にわたって繕い続けている時間と向き合う気持ちが伝わってきます

庭で簡単にできる繕い方法の研究を始めました。

2010年頃は、さまざまな環境問題を社会が取り上げることはあれども、昨今のようにアパレル産業が環境問題に深刻にかかわっているというような統計や報道もありませんでした。ファストファッションが生活に浸透し、安く手軽に購入できる衣類をとっかえひっかえ買い換えられることを『豊かな服との付き合い方』であると誰もが信じていました。安価に作られた衣類ですが、縫製技術の進化で、ボタンがすぐ取れる、裾が落ちるといった衣類の悩みも少なくなりました。しかしながら安価ゆえ生地が著しく悪くなり、しばらく着て生地が柔らかく馴染んで着心地が良くなってきた頃に、小さな穴や擦り切れなどが生じるものが増えてゆきました。ボタン付けや落ちた裾を縫い留めるのとは違い、傷みがあるからとはいえ、ようやく自分に馴染んで愛着が出てきたような衣類を諦めることに大勢の人が無力感を抱えています。ダー

ニングはこのような、どのようにしたら「もう少しでも着続けられるであろうか」を漠然と模索する人たちの気持ちに寄り添うことになるのです。



実際、年間のべ1,000人近くの方を指導する中で見て感じるの、自分の力でこんなことができたんだという喜び、諦めかけていた愛着のある衣類をまた着ることができるという喜びです。ダーニングは非常に多幸感が高い行為であるということは注目すべき点でしょう。筆者がダーニングの指導を始めたころは、ダーニングは自家製味噌作りをするような丁寧な生活を心がける意識の高い30～40代の女性から注目されました。シニア世代も後半の方になると、戦中戦後のつましい時代を思い出させるのか、もったいない精神が染みついているものの、繕ったようなものを身に着けることが恥ずかしいという意識からか、ダーニングを毛嫌いする方が多くいらっしゃいました。NHKの朝の連続ドラマでも、主人公が生活

苦の場面になると家族の衣類を繕っていたり、繕いで賃金を得たりする様子がお約束事のように出てきていることで、広い世代で「繕い＝貧困」の図式が刷り込まれていったように思います。しかし平成世代の若い人達にはそのような既成概念もなく、むしろダーニングは非常に新鮮な行為として興味をもたれました。そうして、コロナ禍で人々が自身の生活に向き合う時間ができたことを機に、またアパレル産業がいかに環境問題へ重責を負っているかということが広く知られるようになり、ダーニングが多くの世代から注目されるようになりました。



写真4、5 ゴマシオダーニングは、小学校の家庭科でも習う返し縫いを繕いの応用したもの。伸縮性や耐久性があるため、伸縮素材が多い現代人の衣類への汎用性が高い。とても単純な刺し方なので、針仕事に不慣れな人でもしやすいテクニックです



写真6、7 ハニカムダーニングは、刺繍のテクニックとして一般的なブランケットステッチを傷んだ箇所にグルグルと刺してゆく手法です。伸縮性があるため、セーターやTシャツ、靴下のお繕いにお勧めしています



筆者がたまたまダーニングをイギリスで習ったことから「さすがイギリスにはそのようにものを大切にする文化があるんですね」といわれることが多いのですが、「衣類の繕いは世界中どこにでもあり、もちろん日本でもありましたよ」とお話をすると大変驚かれることが多く、そのことに私自身が驚かされます。いわゆる日本をはじめとした先進国といわれる国で、衣類を使い捨てるようにとっかえひっかえ着ることができるようになったのはここ50年ほどのことで、それ以前は、衣類は生活の中でも高価で、傷んだら繕いながら着ることが生活習慣となっていました。それほど、繕いという行為が非日常になってしまっているんだと感じます。



レイチェルさんから習った技法は、日本の「かけはぎ」の家庭版。傷んだ箇所に針と糸で縦糸を作り、糸を織り込んで布を再生するような技法です。この技法は家庭版とはいえ針仕事に慣れていない人にはいささかハードルが高いため、私は小学校の家庭科で習う「返し縫い」を応用し、シミ、擦り切れ、穴まで繕う「ゴマシオダーニング」(写真4、5)を考案しました。またブランケットステッチという家庭科の教科書でも紹介される基本の手縫い技術の一つを応用した、まるで蜂の巣のような模様ができる「ハニカムダーニング」(写真6、7)も考案しました。「ゴマシオ」も「ハニカム」もステッチの構造自体に伸縮性があり、伸縮素材への繕いに非常に効果的と実感しています。

ダーニングを始めると、新しい衣類を購入する際にも、「この服は将来ダーニングが似合いそうだ」とか、「少し値が張るけれど大事に着て、将来傷んだらダーニングをすればいいわ」と自分が本当に欲しいものを選ぶようにな



写真8、9 2024年手がけた穴だらけのセーター。ハニカムダーニングで全てを埋めました。また10年着られます



写真10 セーターのオーナーのジョンさん

ります。またダーニングをきっかけに、自分の手でこんなことができたという発見から、他の針仕事やDIYなどに挑戦する人も少なくありません。「新品同様に作る・プロの職人技のような」という呪縛から逃れられると、修繕は実はとてもクリエイティブで私たちの生活を豊かにしてくれる文化的な行為であることに気づきます。それは私たちが毎日大量消費し、モノを使い捨てにする刹那的な行為でむしろ心は、ダーニングをすることで少し潤う。ダーニングがささやかながらもそんな生活のごく日常的な風景になることを期待しています(写真8~10)。